

面白イモノ その3

つくりものは現場で作られる

笹原 亮二 民博研究戦略センター

地元の脈絡とは無関係だが、造形に凝った芸術性の高いつくりものが、審査の場にあらわれた。審査されるのは、つくりものをつくりものたらしめるはずの、現場性そのものかもしれない。つくりものとはなにか？現場とはなんなのか？

口上もあり、寸劇もある審査会

つくりもののおもしろさは、傍目にも理解が容易な造形面以上に、題材の地域性や時宜性など長年祭りであることを作り、見て、批評するなかで培われ、体得され、共有されてきた、地元の人びとならではの想いや感覚に支えられてこそ成り立つ。そうしたつくりものの地域の生活の現場の状況や文脈に深く依存したあり方は、平田一式飾に限ったものではない。



矢部の八朔祭大造り物「なでしこひょう(豹)ひょう(豹)と世界一」と寸劇

熊本県山都町で毎年九月初旬におこなわれる矢部の「八朔祭」では、町内の連合組などによって「大造り物」が作られ、町の各所に飾られる。何れの大造り物も、杉の葉や松笠やスキなどの野山の採集物を用いて台車上に作られ、高さは大きなもので

四メートルを越える。祭りまで出来上がりは秘匿され、祭り当日に囃子や仮装の人びとを伴い町内を巡行してお披露目される。山都町の大造り物は江戸時代中期に八朔行事に因んで始まったとされる。



矢部の八朔祭大造り物「守護神仁王降臨 阿吽(あうん)の呼吸でがんばれ日本」と寸劇

審査員を当惑させるつくりもの

富山県高岡市福岡町では毎年九月三、四日に「つくりもん祭り」がおこなわれ、町内や企業などのさまざまなグループによって野菜類を用いて作られた「つくりもん」が町の二〇カ所以上に飾られる。つくりもんは地蔵の縁日に因んで始まったとされ、かつては「地蔵祭り」とよばれていた。現在も祭りの際は町内の地蔵堂や福岡駅近くに町内の地蔵を集めて法要が営まれている。つくりもんは野菜で作った小さな人物や動物を複数組合せて情景を構成するものが多いが、高さが三、四メートルにもおよび大作も作られる。題材は時事的な話題や人気のアニメやテレビドラマなど周知の話題が選ばれる。例えば昨年の場合、立山の芦峯寺の法会に因んだ「布橋灌頂会」、着工が切望される「北陸新幹線の優姿」、映画のリメイクが話題になった「黒部の太陽のときめき」というように、地元ならではの題材も少なくない。

福岡町のつくりもん「布橋灌頂会」



この祭りでもつくりものの審査がおこなわれているが、昨年は審査に関連して興味深い事態が生じていた。この年は実行委員会の要請で地元の芸術系の大学の学生が初めて祭りに参加した。彼らの「Salada Circus」と題されたつくりもんは、鏡で囲った空間にライトと果物と野菜を配し、外から穴をおしてのぞき込むもので、祭りでは見物の行列も見られた。それに對し、「従来なかった斬新なもので、あらたな風を祭りに吹き込んでくれたが、果たしてこれがつくりもんか評価に困った」という審査員の見解

が表彰式で示された。審査では、つくりものの製作の技術と、いかなる題材をいかに表現するかという趣向の両面で評価が決まるが、何れの面でもどう評価すればいいのかわからず悩んでしまったというのである。

学生のつくりもんが吹き込んだあらたな風が、今後祭りによどのような影響を与えるかも興味こそされたが、そうした審査員の当惑は、つくりもんの性格を却って浮かび上がらせたようにわたしには感じられた。従来のつくりもんでは、作り手と見物人双方に周知の時宜的、地域的、現実的な題材を、技術や趣向や機智を尽くしていかに巧みに表現するかが眼目とされ、地元の人びとの生活の現場の文脈や状況への依存度が極めて高かった。一方学生のつくりもんは、題材と現実の事柄との対応が必ずしも明確ではなく、重要ともされず、地元の人びとの生活の現場から離床した抽象的な表現となっていた。換言すれば、前者は作り手や見物がかかわった祭りという現場の文脈や状況に依存して作られることで、深く豊かな意味や価値を生み出していたのに対し、後者は祭りという現場とのかかわりを必ずしも必要とせず、街のギャラリイにあっても違和感がないような、脱文脈、脱状況依存的な表現として意味や価値を主張していたといえる。審査員の当惑はそんな両者の違いに起因していたのではないだろうか。

博物館を当惑させるつくりもの

福岡町のつくりもんは、来春オープン予定の民博のあらたな日本展示で平田一式飾と山都町の大造り物とともにお目見えする予定である。福岡町のつくりもんに見られた現場の文脈や状況への依存性は、ほかのつくりものにも同様に見られる重要な特徴であるが、そもそも脱文脈、脱状況依存的な博物館の展示室でそれを示さなければならぬのは、何とも悩ましい限りである。もともとそれ以上に悩ましいのは山都町の大造り物である。展示場向けにやや小振りに作ったとはいえ、やはりでかい。地元は「事前に展示場を測ったし、大丈夫、収まります」と太鼓判を押してくれたが、生来の小心者のわたしとしては内心ヒヤヒヤである。